

論説

「礼失われて諸を野に求む」

—— 実例で和刻本漢籍の価値を試論 ——

王 瑞 来

はじめに 欧陽脩の詩から

北宋の有名な文学者である欧陽脩は「日本刀歌」に「徐福行く時書は未だ焚かず、逸書の百篇今尚お存せり（徐福行時書未焚、逸書百篇今尚存）」と詠っている。^{（↑）}徐福という人が始皇帝に不老不死の靈薬を探しに行った時点で、まだ「焚書坑儒」事件は起こっていなかった。そのため、『尚書』の百篇逸書から、それが今日まで日本に残されている、という物語を用い、欧陽脩は作詩法の賦・比・興の「興」を題材として用いた。

欧陽脩の詩に実は一つの重要な事実が示されている。つまり歴代人為的な災禍や自然災害などが文献に甚大な損害をもたらしたが、幸いに一部分の文献は海外へ流出したため、意外に保存されてきたというものである。

そのような保存は世界の各地に所蔵されている漢籍から見られるが、昔の漢字文化圏に位置する日本に最も多い

であろう。欧陽脩の詩はまさに日本のことを述べている。なおかつかれが述べたことは事実無根の詩人の想像ではない。『宋史』『日本国伝』に「其の国に中国の典籍多く有り。蕭然の來たるは、復た『孝経』の一卷、『越王孝経新義』第十五の一卷を得、皆金縷紅羅標にし水晶を軸と為す。『孝経』、即ち鄭氏注なり」と記している。⁽²⁾これは北宋二代目皇帝太宗の時期のことであった。さらにさかのぼってみれば、北宋の『楊文公談苑』によって、宋代に入る前の五代時期の呉越国王銭俶はかつて商人を通して日本国主に手紙を出して黄金五百両で天台宗の經典を求めた往事があった。後にこのような逸事は詩人欧陽脩の話題となったのである。

漢字文化圏における文化交流において漢籍は一つの媒介であった。この『宋史』など文献の記事が示しているのは、漢籍は一方通行で日本に流れていくのみならず、すでに十世紀頃にはその母国中国に還流することもあった。「逸書百篇今尚存」という欧陽脩が述べた事実は十九世紀ごろからついに中国の学者に新しく重視されるようになり、日本への訪書ブームが始まった。孔子の「礼失われて諸を野に求む」⁽³⁾という発言は春秋時期の礼儀制度に関することであるが、まさに後世漢籍の伝播状況への予言のようであろう。

日本の宋代史学者梅原郁氏は『皇朝類苑』の「景印にあたって」という前書きに「長い歴史の歩みのうちに、中国で失われ、日本に渡って生き続けた書物は一、二にとどまらない。『遊仙窟』や『群書治要』のように著名ではないが、南宋の江少虞が撰した『皇朝事宝類苑』もその仲間の一つに数えてよからう」と指摘している。⁽⁴⁾ここでは梅原氏が使用した「生き続け」という言葉は日本における漢籍について表すのに、まさしくふさわしいものであると思われる。日本での漢籍の状況は二種類に分けられる。一つは保存である。つまり宋版、元版、明版のまま所蔵する。この部分の漢籍に目を向ける中国の学者は多い。もう一つは再生であるといえる。そして、この再生の過程によって、梅原氏が述べられたように漢籍は日本において「生き続け」たわけである。つまり、「生き続け」の方

式とは新たな刊行と再版である。このような「生き続け」は和刻本漢籍を生んだ⁽⁵⁾。しかし、相対的にこのような和刻本漢籍にまだ中国の学者が充分な注目が向いていないのではないかと思われる。

十三世紀の「五山版」から近代の明治期にわたって、日本では数多くの和刻本漢籍が刊行された。長沢規矩也氏の『和刻本漢籍分類目録』⁽⁶⁾はそれを物語っている。大まかに言えば、中国の文史研究に対して、和刻本漢籍の価値はその二種類の存続状況によって表している。一つは中国に完全に伝わらなくなったものである。それは梅原氏が取り上げた『遊仙窟』や『群書治要』などの漢籍である。このような和刻本漢籍の価値はくどくど言うまでもない。もう一つはその漢籍は中国に現存しているが、和刻本はそれより内容が多く、ひいては完本であるというものである。この部分の和刻本漢籍の史料と文献の価値も非常に高いが、残念ながらまだ充分に重視されていないのが現状である。本論においては、後者について、これまでの研究において経験した二つの和刻本漢籍を取り上げ、一斑をみて全豹を卜すという言葉のように、和刻本漢籍の価値を示して研究者の注意を喚起していきたい。

一、『皇朝事実類苑』

(一)『皇朝事実類苑』について

この書について、十九年前に『『皇朝事実類苑』雑考』を題として小考を発表したことがある⁽⁷⁾。以下に述べるのは旧作の考証結果に基づくものである。『皇朝事実類苑』はすなわち前に引いた梅原氏が言った『皇朝事宝類苑』である。旧字の「實」と「寶」の字形が近い⁽⁸⁾ため、和刻本に「宝」に誤ったであろうと思われる。この書とは、南宋初年の地方官を担当する江少虞が五十種類以上の宋代隨筆などの文献から事項別に分類抄録して二千以上の小項

目を立てた百科事典のようなものである。『四庫全書簡明目録』卷一三子部雜家に

事實類苑六十三卷、宋江少虞編す。少虞、宋代朝野事迹の諸家に散見する記録を以て乃ち裒集排纂し、類して二十四門と為す。並びに原文を全録し、點竄を加えず、仍お各々書名を以て條の下に注して以て徵有ることを示す。援引浩博、北宋一代の遺聞は略ぼ是れに具わる。其の原書散佚する者、亦た皆な此れに頼り以て存す。(事實類苑六十三卷、宋江少虞編。少虞以宋代朝野事迹散見諸家之記録、乃裒集排纂、類為二十四門、並全錄原文、不加點竄、仍各以書名注於條下、以示有徵。援引浩博、北宋一代之遺聞、略具於是。其原書散佚者、亦皆賴此以存)

とこの書を評価している。

(二) 『皇朝事實類苑』の成立

書の前に江少虞が紹興十五年(一一四五)に書いた自序がある。これは『皇朝事實類苑』の成立した年と見なされる。この年は北宋が女真人の金に滅ぼされて江南で王朝を再建してから十八年目にあたる。昔の士大夫は隨筆を書く風雅な趣があるが、『皇朝事實類苑』の編纂についてはただの風雅な趣によるものだけでなく、南宋初期に政權体制や法令制度などの再建風潮とともに、北宋の「祖宗の法」を回復するという精神的再建の一環を反映していると思われる。

(三) 『皇朝事實類苑』の初刊

和刻本『新雕皇朝類苑』は、目次第三卷の末に「紹興二十三年(一一五三)癸酉歲中元日麻沙書坊印行」という

十八字があるため、『皇朝事實類苑』は完成した八年後、武夷山の南麓にある建陽で刊行されたということがわかる。建陽は宋代に「図書の府」で知られる。その「図書の府」の雰囲気⁽⁹⁾で朱熹が育まれた。後の建陽は朱熹の故里として「理学の邦」と呼ばれる。その有名な建陽にある麻沙書坊は紹興十年（一一四〇）に『皇朝事實類苑』の体裁と類似した曾慥の『類説』を刊行したことがある。その十三年後、『皇朝事實類苑』が刊行されたことについて、麻沙書坊の一貫した出版方針および販売の効果と利益が見えるのであろう。

（四）『皇朝事實類苑』の書目著録

まずは『皇朝事實類苑』に関する宋代での著録を見よう。

陳振孫の『直齋書錄解題』の『永樂大典』輯本卷一四に

皇朝事實類苑二十六卷、知吉州江少虞撰す。紹興中の人。其の書亦た小説類に入る可し。

とある。また、馬端臨の『文獻通考』卷二二八「経籍考」においてそのまま『直齋書錄解題』を抄録している。

王應麟の『玉海』卷五五に

紹興皇朝事實類苑、紹興中、江少虞撰次し、二十六卷。祖宗聖訓、名臣事迹及び藝術、仙釋、神怪、夷狄、風俗、釐かれて二十六門と為す。

とある。

宋朝国史に由来する『宋史』『藝文志』に二カ所の中で著録してある。卷二〇三史類「故事類」に

江少虞皇朝事實類苑、二十六卷。

とあるが、子類「類事類」にも全く同じ文字が見られる。また、明代凌迪知『万姓統譜』卷三「江少虞」の条に

「著す所の宋朝類要、詔して史館に蔵せしむ」と見える。この「類要」は「類苑」の誤りと思われるが、これによつて江少虞の『皇朝事実類苑』は朝廷に呈上されたものであり、皇帝が史館に収蔵させると命じたものであることがわかる。これは国史芸文志に収録され、後に『宋史』『芸文志』の著録に見えるゆえんである。

次に、伝統的書目の集大成である『四庫全書総目提要』の著録を見てみよう。

卷一二三子部雜家類に

事實類苑六十三卷、宋の江少虞撰す。…凡そ二十四門。自序に二十八門と作るは、蓋し伝録の訛なり。…王士禎又た此の書四十卷と載し、而ども今本寔は六十三卷。諸本を検勘するに皆な合い、並びに同異無し、疑うらくは亦た士禎の筆誤の失ならんと云う。（事實類苑六十三卷、宋江少虞撰。…凡そ二十四門、自序作二十八門、盖伝録之訛也。…王士禎又載此書四十卷、而今本寔六十三卷。檢勘諸本皆合、並無同異、疑亦士禎筆誤之失云。）とある。

(五) 『皇朝事実類苑』の現存版本

『皇朝事実類苑』の現存版本は、『現存宋人著述総録』の著録によつて、『新彫皇朝類苑』を題とする上海圖書館所蔵の明抄本六十三卷、『事実類苑』を題とする『四庫全書』本六十三卷、『新彫皇朝類苑』を題とする民国『誦芬室叢刊初編』本七十八卷、『宋朝事実類苑』を題とする一九八一年上海古籍出版社の七十八巻校点本、とそれぞれ存在する。さらに日本の『全國漢籍データベース』を調べてみると、以上の版本のほか、また日本の宮内庁書陵部や公文書館など複数の蔵書機関に『新彫皇朝類苑』あるいは『皇宋事実類苑』を題とする元和七年刊古活字勅版本七十八巻が所蔵されてある。

(一六) 『皇朝事実類苑』における二つの版本系統

以上の現存版本を見れば、『皇朝事実類苑』は六十三巻本と七十八巻本という二系統があることがわかる。そして、事項として六十三巻本では二十四門に分類するが、七十八巻本は二十八門に分類されている。

まずは七十八巻本を述べたいと思う。江少虞が紹興十五年（一一四五）に書いた自序では明確に「釐為二十八門」と記してあるため、完成した時点で『皇朝事実類苑』は七十八巻であるということが断定できる。この点については、和刻本の由来する麻沙書坊が刊行した七十八巻本によっても証明できる。ただ麻沙書坊本は書が完成したばかりの八年後に刊行したものである。その直後の紹興二十九年（一一五九）にこの七十八巻本が伝わったという記録も史籍に見える。『建炎以來繫年要録』卷一八二に「（六月）己丑、秘閣修撰・提學江州太平興國宮張九成卒し、年は六十八。九成は風を病むを以て廢し、且つ明を喪う。前の五日、兩疾頓に除き、其の親旧皆な喜ぶ。是に至たりて、偶々諸生と江少虞集する所の『皇朝類苑』を読む。章聖東に封じて、丁謂の玉帶を取る事に至りて、忽に怒りて曰く、丁謂姦邪、人主の物と雖も亦た術を以て取ると。因りて憚らず、巻を廢して入る。疾復び作こり、言う能わず、一夕に卒す。（己丑、秘閣修撰提學江州太平興國宮張九成卒、年六十八。九成以病風廢、且喪明。前五日、兩疾頓除。其親旧皆喜。至是、偶與諸生誦江少虞所集『皇朝類苑』。至章聖東封、丁謂取玉帶事、忽怒曰：『丁謂姦邪、雖人主物亦以術取。』因不憚、廢卷而入。疾復作、不能言、一夕卒」とある。調べてみると、「丁謂取玉帶事」は『類苑』卷七一の「詐妄謬誤」門にある。これによって張九成が読んだ『類苑』は七十八巻本であることがわかる。しかし、これは中国の文献上で唯一の七十八巻本の使用記録である。

その後南宋宰相周必大が『文忠集』卷一五八に引用した「瓊花」の条は『類苑』の卷六〇に見える。元代陶宗儀

の『説郭』卷三七に引用している五条の『類苑』はそれぞれ卷八、九、一〇、一三において見つけることができる。現存版本では、明抄本と『四庫全書』本はともに六十三卷本であり、『誦芬室叢刊初編』本は七十八卷であるが、実はそれは和刻本の元和七年刊古活字勅版本の復刻本である。

以上の事実が表明したのは、南宋紹興年間以降、『類苑』の七十八卷本は行方不明となってしまったが、明代後期に当たる元和七年（一六二一、天啓元年）に日本において現われ、刊行されている。

次は六十三卷本のことを見てみたいと思う。

明抄本と『四庫全書』本が現存する事実から見れば、六十三卷本は主に写本の形で中国に伝わっており、またかなりまれであった。前述した宋代の書目文献で『類苑』に関する著録からもう一つの事実が窺える。『直齋書錄解題』、『玉海』および『宋史』は、いずれも『類苑』を二十六巻と著録してある。この「二十六巻」は「六十一巻」の数字が逆さまとなり、齟齬が生じた可能性が極めて高いと思われる。なぜなら、六十三巻の『四庫全書』本を七十八巻の和刻本と比較考察して見ると、六十三巻本は七十八巻本の六十一巻分に相当する。その第三十五、三十六、三十七巻は和刻本の第三十五、三十六巻であり、第四十、四十一巻は和刻本の第四十巻である、というわけである。この推測が成り立つならば、南宋の二十八門七十八巻の麻沙本『類苑』が刊行された後、その伝播はまもなく跡を絶ってしまったといえる。そして、その後には細々と続いて伝わっているのは二十四門の六十三巻本である。

（七）『皇朝事實類苑』の二系統版本の関係

六十三巻本は七十八巻本より實際上で十七巻分の内容が少ない。この六十三巻本の由来がいったい何であるのか。その少なくなった四門十七巻は散逸したのか、それとも別の原因があるのか。はっきりと考察するために、『類苑』

分類項目を表に作成する必要だと思われる。

二欄に分けた分類項目表の前半は六十三巻本の内容であるが、後半を加え、七十八巻本となった。この分類項目表を見ると、七十八巻本の最後の四門十七巻の内容は六十三巻本にない。

六十三巻本の巻末に江少虞のもう一つの自序が見える。

表 1

祖宗聖訓 (一〇五、卷五まで)、 君臣知遇 (一一二、卷七まで)、 名臣事迹 (一一五、卷二一まで)、 德量智識 (一一二、卷一四まで)、 顧問奏對 (一一二、卷一六まで)、 忠言讜論 (一一二、卷一七まで)、 典禮音律 (一一三、卷二〇まで)、 官政治績 (一一三、卷二三まで)、 衣冠盛事 (卷二四)、 官職儀制 (一一四、卷二八まで)、 詞翰書籍 (一一三、卷三一まで)、 典故沿革 (一一二、卷三三まで)、 詩歌賦詠 (一一六、卷三九まで)、 文章四六 (卷四〇)、 曠達隱逸 (一一二、卷四二まで)、 仙釋僧道 (一一二、卷四四まで)、 休祥夢兆 (一一三、卷四七まで)、 占相醫藥 (一一二、卷四九まで)、 書畫伎藝 (一一三、卷五二まで)、 忠孝節義 (一一二、卷五四まで)、 將帥才略 (一一三、卷五四、卷五六まで)、 知人薦舉 (卷五七)、 廣知博識 (一一二、卷五九まで)、 廣知博識 (卷五九)、 風俗雜誌 (一一二、卷六一まで)、	風俗雜誌 (一一三、卷六二)、 談諧戲謔 (一一五、卷六七まで)、 神異幽怪 (一一二、卷六九まで)、 詐妄謬誤 (一一五、卷七四まで)、 安邊禦寇 (一一四、卷七八まで)
---	--

少虞、幼いより雜覽を喜び、家居に諸史・雜

記の風化に関わる者を摘し、此の篇を纂し成り、題して皇宋事實類苑と曰う。本朝の祖宗聖訓より始まり、風土雜志に終わり、總て六十三巻とす。少虞不敏、何ぞ敢て著述と為さんや、但だ舊を伝うのみ。之れ歳月を考えれば、十四の寒暑を越え、更らに博洽君子焉を訂すを俟つ。

紹興戊寅九月日、江少虞志す。

(少虞自幼喜雜覽、家居摘諸史雜記關於風化者、纂成此篇、題曰皇宋事實類苑。始於本朝祖宗聖訓、終於風土雜志、總六十三卷。少虞不敏、何敢為著述、但傳舊而已。考之歲月、越十四寒暑、更俟博洽君子訂焉。紹興戊寅九月日江少虞志)

とある。この紹興戊寅は紹興二十八年（一一五八）である。江少虞の紹興十五年（一一四五）の自序に対して、この序は後序と呼ぶことができる。はっきりと比べるために、つぎは江少虞が紹興十五年に書いた前序の關係する部分を引き出してみる。

曩、餘暇に因り、備えて極めて討論す。一話一言自り、皆な比附倫類して之れを整齊とす。其の文雅馴とせず、或いは牴牾有る者を去る。餘自り實を抛りて條次し、敢えて一字を以て増損せず。凡を總べて目を會め、合わせて一書と爲し、名を皇宋事實類苑と曰う。聖謨神訓、朝事典物、および勳名賢達、前言往行、藝術仙釋神怪の事、夷狄風俗の殊、纖悉なるを備有し、釐めて二十八門と爲す。

（曩因餘暇、備極討論、自一話一言、皆比附倫類而整齊之、去其文不雅馴、或有牴牾者。自餘據實條次、不敢以一字増損、總凡會目、合爲一書、名曰：皇宋事實類苑。聖謨神訓、朝事典物、與夫勳名賢達前言往行、藝術仙釋神怪之事、夷狄風俗之殊、纖悉備有、釐爲二十八門）とある。

江氏本人の前後両序文を比べてみると、『類苑』に關する情報をいくつか得られる。前序に『類苑』の卷数を明確に記さないが、二十八門に分けることを記しているのは、七十八卷本の項目分類と合致する。また内容について、「仙釋神怪の事、夷狄風俗の殊」という表現によって、すでに卷六八、卷六九の「神異幽怪」と卷七五以後の「安邊禦寇」項目にまで及んでいる。これはいずれも前序でいう『類苑』が七十八卷本であることを物語っている。しかし、後序には「祖宗聖訓より始まり、風土雜志に終わり、總て六十三卷とす」と記してある。この「六十三卷」の卷数と終了の項目「風土雜志」は、明確に『類苑』は二十四門を分ける六十三卷本であるということを示す。

また、江氏本人が自ら書いた前後両序文は矛盾があり、それをどう解釈するべきか。

この問題は、まず『四庫全書』の編集者を当惑させた。全く七十八巻本の存在を知らなかった四庫館臣は江少虞自序での「釐かれて二十八門と為す」という文句を不可解と思ったため、『四庫提要』に「蓋し伝録の訛なり」と曖昧に推測した。さらに七十八巻本に依拠して整理して句点を入れた上海古籍出版社の『類苑』の「出版説明」にも「七十八巻本と六十三巻本との関係は、いまなおはっきりわからない」とその困惑が伺えるような文章で表している。実は清代の四庫館臣と今日の上海古籍出版社の整理者を困惑させた原因は、その前後両序文に対する理解の偏りおよび見落とした内容があったという点にある。謎となっている部分の答えはまさにその両序文に存在するといえる。

前序によると、紹興十五年（一一四五）の時点で成立した『類苑』は確かに二十八門の七十八巻である。またこの七十八巻本は和刻本の刊記によって紹興二十三年（一一五三）に刊行した。さらに刊行後の七十八巻本は李心伝の『建炎以来繫年要録』によって紹興二十九年（一一五九）の時点で当時の人に読まれる記録も見られる。ところが、紹興二十八年（一一五八）に書いた後序によると、『類苑』は二十四門の六十三巻となった。異なる前後時期に編纂者本人が書いた両序文では、このような事実を表している。つまり六十三巻本の『類苑』は伝播の過程に散逸したものではなく、編纂者江少虞が自ら削除した結果によるものである。なぜ江少虞は『類苑』刊行の六年後に改めて『風俗雜誌』の一部と「談諧戲謔」「神異幽怪」「詐妄謬誤」「安邊禦寇」という四項目あまりの十七巻を削除してしまったのか。具体的な真相はすでに考証できなくなったが、前述した当時の人が『類苑』に記されている内容によって宋代史上の人物に善し悪しを論評した記録が見られる。この記録から、推測してみると、紹興年間には南宋前期として北宋から遠く離れていない時期にあたるため、当時の有力者の先祖が批判された内容がこの四項目のなかにあった可能性がある。編纂者江少虞が思わぬ災難にみまわれることを避けるため、削除訂正の作業を行っ

た可能性がないわけがないといえるであろう。また四庫館臣に『類苑』の編纂年月に誤解させた「十四の寒暑を越え、更らに博洽の君子焉を訂すを俟つ」という後序の文句は、『類苑』の完成から後序の執筆まで十四年を経たが、ご批正を願う、というような意味である。こうした謙遜の表現は、やはり非難を招いてしまうことをおそれたという苦衷が流露したものといえるのではないであろうか。

要するにどのような原因を問わず、編纂者江少虞本人が削除訂正の後、『類苑』は中国に六十三巻本の形で伝わっており、七十八巻本がほぼ跡を絶つようになった。幸いは、江少虞が削除訂正の作業を行う前に刊行された麻沙本『類苑』は早々と日本に伝来してさらに再刊行によって生き延び、ついに『類苑』の完本は今日まで残され、清末に中国に還流した。七十八巻本が世に生きたことは編纂者江少虞の志と違つかもしれないが、豊富な史料がこれによって保存されたのは何よりも重要であろう。

(八) 和刻本『皇朝事実類苑』の史料価値举例

『皇朝事実類苑』は五〇種類以上の史籍や随筆などの抄録からなるものである。その抄録された五〇種類以上の史籍や随筆などについては、現在その大半をすでに散逸或いは不完全な状態にしまっている。だが、『皇朝事実類苑』を頼って多くの内容が保存されることに成功している。『皇朝事実類苑』は散逸したものを集める淵藪の一つであると言えるよう。日本が輸入して再刊行するという和刻本の形で日本に伝わり、そして二〇世紀の初頭にはじめて中国に還流したとされる『皇朝事実類苑』の初刊七十八巻本は、中国に伝わっている編纂者江少虞の再訂版六十三巻本より一七巻も多い。この一七巻の分量は約一〇万字に達している。部類として「風俗雜誌」門の第三巻一卷と「談諧戲謔」門五巻、「神異幽怪」門二巻、「詐妄謬誤」門五巻、「安邊禦寇」門四巻である。この四門余り

の内容のなかで、すでに散逸してわずかに『類苑』だけ見られるものも存在するため、その史料価値と校勘価値は非常に高いといえる。次において、ほんの一つの例を取り上げてみる。

北宋熙寧五年、つまり延久四年の冬（一〇七三年）、五臺山を巡礼して宿泊先である開封太平興国寺の傳法院に戻った成尋は、梵才三蔵から『楊文公談苑』という書を借りて、そのなかの日本に関係する記事を意外にも発見し、喜んでその数条を日記に書き写した。『參天台五台山記校本並に研究』を著した平林文雄氏は、「この『談苑』は現存せず、成尋所引のこの一章は貴重な資料となっている」と述べている。⁽¹⁰⁾確かに平林氏が述べた通り、北宋前期有名な文人楊億の話を記録する『楊文公談苑』は現存せず、散逸してしまっている。しかし成尋の抄録は『楊文公談苑』の唯一の残存ではない。一九九〇年代に中国の学者は宋代以降の文献から佚文二三三条を蒐集して『楊文公談苑』の輯本を作りあげて刊行した。⁽¹¹⁾この輯本による主な蒐集文献が、まさに『皇朝事實類苑』である。『類苑』では数多くの『楊文公談苑』を引いている。全書のあちらこちらにその引用が散見しているが、六十三巻本にない七十八巻本の最後の十七巻だけを調べると、意外にも三〇条の『楊文公談苑』の引用文がある。成尋が書き写した第一条もちょうど巻七八に見える。このような日本の研究における重要史料は中国の六十三巻本では見られなくなった。

平林文雄氏校訂本『參天台五台山記』巻五に抄録した『楊文公談苑』の第一条は以下の通りである。

公言。雍熙初日本僧裔然來朝。獻其國職員令年代記。裔然依錄自云。姓藤原氏為真連國五品官也。裔然善筆札而不通華言。有所問盡以對之。國有五經及釋氏經教。並得於中國。有『白居易集』七十卷。第管州六十八。土曠而人少。率長壽。多百餘歲。國王一姓相傳六十四世。文武僚吏皆世官。予在史局閱所降禁書。有日本年代紀一卷及裔然表啟一卷。因得修其國史傳其詳。裔然後歸國。附商人船奉所貢方物為謝。案日本倭之別種也。以

國在日邊故以日本為名。或言。惡倭之名不雅改之。蓋通中國文字故唐長安中遣其大臣真人來貢。皆讀經史善屬文。後亦累有使至。多求文籍釋典以歸。開元中有朝衡者。隸太學應學。仁至補闕求歸國。授檢校秘書監放還。王維及當時名輩皆有詩序送別。後不果去。歷官至右常侍安南都督。吳錢氏多因海舶通信。天台智者教五百余卷有錄而多闕、賈人言日本有之。錢俶置書於其國王奉黃金五百兩求寫其本盡得之。沉今天台教大布江左⁽¹²⁾と。

この引用文を『類苑』の引用と比べて見ると、若干の文字異同がある。こうした異同はその史料の意味理解に関わる。次はその主な異同を校勘してみよう。

「一」 「齋然依錄自云姓藤原氏為真連國五品官也」 「依錄」、「類苑」は「衣緑」に作り、正しい。緑の衣服を着るのは人のある身分を示す。これは後に述べる内容に関連する。正しい句点は「齋然衣緑、自云姓藤原氏、為真連、國五品官也」とすべき。

「二」 「有所問盡以對之」 「盡」、「類苑」は「書」に作る。前文の「齋然善筆札而不通華言」を見れば、「書」に作るは正しい。これは字形の類似により生じた誤り。

「三」 「第管州六十八」 「第」、「類苑」は「地」に作るが、「第」は正しい。これは管轄する州の数が少ないことをいう。

「四」 「因得修其國史傳其詳」 「其」、「類苑」は「甚」に作り、正しい。「傳」は伝えることなく、「史傳」と合わせて紀伝体史書の列伝のこと。ここで宋朝国史の日本国伝を指す。

「五」 「或言惡倭之名不雅改之」 「類苑」は「不惟改之」に作るが、脱文も有るし、文字も誤り。

「六」 「隸太學應學仁至補闕求歸國授檢校秘書監放還」 「類苑」に二つ目の「学」は「挙」に作り、「仁」は

「仕」に作り、「檢」は「検」に作り、ともに正しい。「応挙」は科挙試験に参加すること。「仕」は入官のこと。「檢校」は官名の一部。正しい句点は「隸太学、应举、仕至補闕、求帰国、授檢校秘書監、放還」とすべき。

〔七〕「歴官至右常侍安南都督」「類苑」に「至右」は「左右」に作り、「都督」は「郡督」に作る。案ずるに、朝衡の官職について、『旧唐書』卷一九九日本国伝に「左散騎常侍、鎮南都護」に作り、『新唐書』卷二二〇日本国伝に「左散騎常侍、安南都護」に作る。これによって『五台山記』と『類苑』はともに誤りがある。

〔八〕「錢俶置書於其國王」「國王」「類苑」は「国主」に作り、正しい。北宋の建国後、南唐、呉越などの南方諸国の国王はランク下の「国主」と改称したため、呉越は自らの立場から日本国王を国主というのが当然であると思われる。⁽¹³⁾

〔九〕「沉今天台教大布江左」「沉」は通じず、『類苑』は「訖」に作り、正しい。

以上の校勘を見れば、『五台山記』と『類苑』の抄録はそれぞれ長じているところがある。残念なのは平林文雄氏が『参天台五台山記』を校訂された際、十数以上の別本を使われたが、『類苑』の『楊文公談苑』の引用文を使われなかった。また藤善眞澄氏の論文「成尋と楊文公談苑」⁽¹⁴⁾において、成尋が日本に初めて齎したと思われる『楊文公談苑』がすでに散佚しているため、この『参記』に書写したものが大変貴重なものと見なされている。藤善眞澄氏も七十八巻本『皇朝事実類苑』に数多くの『楊文公談苑』佚文が存在していることを知られないようである。中国側にも同じ状況がある。六〇年代正史と呼ばれる『二十四史』のひとつである『宋史』を校勘する際に、当時多くの一流の歴史学者がその作業に参加した。『宋史』卷四九一「日本伝」を校勘するとき、以下の校勘記を作っ

た。

職員令 「今」、日成尋參天台五台山記延久四年十二月二十九日條引楊文公談苑作「令」、清黃遵憲日本國志卷五也作「令」、當是。

と。

なぜ『參天台五台山記』だけ用い、以上に挙げた『皇朝事實類苑』を使わなかったのか。やはり、二〇年代に和刻本から復刻した七十八卷本『皇朝事實類苑』があるにもかかわらず、学者たちに知られなかったため、知名度の高い『參天台五台山記』が使われたのであろう。また、近年来、インターネット上に公開された杭州工商大学王勇氏監修の句点入れ『參天台五台山記』がある。その『楊文公談苑』引用文部分を『皇朝事實類苑』と比較して、『類苑』を使わなかったことがわかる。これも恐らく、知らなかったのがその原因であらう。

(九) 和刻本『皇朝事實類苑』の価値と伝播史の考察からの思考

以上の考察をまとめみると、『皇朝事實類苑』の成立と伝播の経過は以下の通りである。

- 一一四五（紹興十五年）、七十八卷本は完成。
- 一一五三（紹興二十三年）、建州麻沙書房にて刊行。
- 一二五八（紹興二十八年）、六十三巻の原編者江少虞の改訂本が完成。
- 一二五九（紹興二十九年）、文献にて七十八巻本の伝播記録が残る。

その後、中国での書目の著録は六十三巻本の一色となる。

一六二一（日本元和七年、明天啓元年）、日本は麻沙書房の七十八巻本を木活字で刊行。

一七七〇年代、『四庫全書』は六十三卷本を収録。

一九二〇年代、董康は日本の木活字本を復刻して『誦芬室叢刊初編』本に収録。

七十八卷本は中国に初めて還流。

一九八一年、上海古籍出版社は董康の七十八卷本を校勘して出版。

以上の伝播史を見ると、『皇朝事實類苑』という書物は完成した一四年後、原編者江少虞の削除改訂によって六十三卷本となり、それから中国では七十八卷本の跡がほとんど消失してしまい、ただ六十三卷本だけがまれに伝わるようになった。『四庫全書』の編纂開始の際に全国の範囲で珍しい書籍を搜していたが、七十八卷本は現れていなかった。こうした事実によって、考えるべきこととして、一六二一年に日本に刊行された七十八卷本はいつ頃どこから流入したのかという点があげられる。これを推測してみると、およそ原編者江少虞の削除改訂の前に、刊行された麻沙書房七十八卷本がすでに日本に輸入されてきたであろう。この推測が成立するのならば、十二世紀の日本中間における書籍流通の速さがうかがえる。

一方、和刻本の価値が見落とされる傾向が見られる。成尋が抄録した日本関係史料の『楊文公談苑』を収録する『皇朝事實類苑』の和刻本はずっと日本のあちらこちらに所蔵されており、容易に見られるが、平林文雄氏が『参天台五台山記』を校訂するとき、意外にも利用されていなかった。また一九二〇年代に和刻本『皇朝事實類苑』が中国に還流して刊行され、さらに一九八〇年代に新式の句点入りの整理本も出版されたが、中国側の『参天台五台山記』の校訂作業においても『皇朝事實類苑』は使われなかった。こうした事実はやはり和刻本の価値を十分に重視していないということを物語っているであろう。一方、中国史研究分野と日本史研究分野との間に学科間の隔りを痛感している。

二、『鶴林玉露』

(一)『鶴林玉露』について

『鶴林玉露』は南宋人羅大経が著した有名な隨筆である。『鶴林玉露』に載せている著者が生活する南宋の時事や詩文および理学や文学の評論などは、高い史料価値と研究価値を有する。世に問うた後、広く引用改編され、ひいては做った作品も出ており、⁽¹⁶⁾歴代文人の愛読書となった。清代乾隆帝にも「黄を批して稍や暇として餘事無し、静に鶴林玉露の篇を読む」という詩句がある。⁽¹⁷⁾この隨筆の校勘本はわたくしの大学卒業論文として一九八三年出版された以来、すでに四回再版増刷されている。⁽¹⁸⁾『鶴林玉露』について、校勘する際、著者と版本を考証して初版の書後に「羅大経生平事跡考」と『鶴林玉露』版本源流考」という二文を附したが、三刷りの際、さらに「羅大経生平事跡補考」一文を附した。下記に述べることはその諸文をまとめたものである。

(二)『鶴林玉露』の版本系統

歴代文人の愛読書であるため、『鶴林玉露』の版本はかなり多く、十数種類以上に達した。その状況は前述した『皇朝事實類苑』とよく似ており、『鶴林玉露』も二つの版本系統を有している。つまりは和刻本を代表とする十八卷本と明万曆本を代表とする十六卷本である。そして、十八卷本に六卷ずつ甲乙丙三集が分かれ、それぞれ著者羅大経の自序があるため、異なる時期に作成されたものがわかる。これは『鶴林玉露』が完成した時点の原状である。中国には六卷を単位とする残本が二部しか発見されなかったため、十八卷本足本は未発見であった。一方で日本で

はかなり流行し、少なくとも二回刊行されたことがある。中国に広く伝わっているものは十六卷附補遺一卷本である。それは明代以前の版本状況は未詳であるが、遅くとも明代初期にはこの状況となったと思われる。

(三) 和刻本『鶴林玉露』の由来

寛文二年（一六六二）刊『新刊鶴林玉露』活字本の表紙に「覆明万曆刻本」、巻頭に閩人黄貞昇が万曆十二年（一五八四）に書いた「重梓鶴林玉露題詞」という序文を載せている。これを見れば、この和刻本は明代万曆本に由来するものである。だが、実際にはそうではない。その証拠の一つは、黄貞昇のこの題詞に『鶴林玉露』の版本・巻数などを全く触れず、ただ書の内容を紹介するだけであり、また現存した二種類の万曆本とともに黄貞昇の題詞を載せていないという点にある。またその証拠のもう一つは、もう一つの和刻本である慶安元刊活字本（一六四八年頃）を考察してみると、それは寛文本を直接継承する関係を持つことがわかるという点である。両本の題名はともに「新刊鶴林玉露」という。また慶安本の誤りや脱文などには寛文本も全く同じである。しかし慶安本に黄貞昇の題詞はなく、これは寛文本が表紙でいう「覆明万曆刻本」ではないことを表している。寛文本が「覆明万曆刻本」と偽称するということになると、たぶん江戸時代に多量の明朝書籍が日本に輸入されて日本人の中国趣味が高まるという背景のもので、同時に日本に輸入した十六巻本の黄氏題詞を旧来の十八巻本の前に加え、「覆明万曆刻本」と名乗ると売れたという広告的な効果があると考慮されていたのであろう。

(四) 十八巻本と十六巻本との関係

わたくしの考証によると、中国に広く伝わっている十六巻本は十八巻本の散逸後の再編本にあたる。十八巻本と

表 2

十八巻本	十六巻本	十八巻本	十六巻本	十八巻本	十六巻本
甲編巻一	(注一)	乙編巻一	巻七	丙編巻一	巻一
甲編巻二	(注二)	乙編巻二	巻八	丙編巻二	巻二
甲編巻三	巻二三	乙編巻三	巻九	丙編巻三	巻三
甲編巻四	巻一四	乙編巻四	巻一〇	丙編巻四	巻四
甲編巻五	巻二五	乙編巻五	巻一一	丙編巻五	巻五
甲編巻六	巻一六	乙編巻六	巻一二	丙編巻六	巻六

注一：十八巻本甲編巻二は二九条がある。その中で十六巻本補遺の一五条、巻四の七条、巻五の五条、巻一一の二条を含む。

注二：十八巻本甲編巻二は三三条がある。その中で十六巻本補遺の一条、巻五の六条、巻六の一条、巻九の五条、巻一一の一条、巻二の四条、巻三の四条、巻一五の一条を含む。

十六巻本の補遺一卷の形成時期は明万曆三十六年（一六〇八）頃である。明万曆三十六年に南京都察院が万曆七年刻本を補修する際に十八巻本の甲編六巻が発見され、その中で十六巻本にない二〇条近くを輯佚して補遺として巻一六の後に追加した。この経緯は明万曆三十六年南京都察院刊本の孫鑛跋によってわかるものである。

（五）和刻本『鶴林玉露』の価値概観

中国に広く伝わっている十六巻本はすでもとの姿から大幅に離れており、著者羅大経の序文を載せず、甲乙丙の編を分けず、巻順番が混乱している。また、内容が散逸して、各条の見出しも削除された。ところが、和刻本

十六巻本を比べて見ると、両本の順番と内容の対応関係は上表の通りである。この表を見ると、巻を単位とするという点において、十六巻本は十八巻本の原状を保持しているが、甲乙丙という編を分けず、また順番も逆になっており、丙編の六巻は巻一、巻六、乙編の六巻は巻七、巻一二、甲編の巻三、巻六は巻一三、巻一六に当たる。甲編の巻一、巻二の条目は各巻に散見しているほか、補遺となった。

『鶴林玉露』の方は著者羅大経が完成した時点の十八巻本の様子を完全に保っている状態である。明初に編纂された『永樂大典』残本の一九条『鶴林玉露』の引用文を考察してみると、十八巻本と十六巻本の文字異同があれば、『永樂大典』の引用文はすべて十八巻本と同じである。この和刻十八巻本は明代以来の十六巻本より四〇条の内容が多い。これだけでなく、十八巻本と比べてみると、十六巻本の条目として散逸していない部分に脱文もある。したがって全体から見れば、『鶴林玉露』和刻本の価値は明らかにわかるのであろう。

(六) 和刻本『鶴林玉露』の価値の具体例

『皇朝事実類苑』と同じように、『鶴林玉露』にも日本関係の史料がある。これは十八巻本内編巻四の「日本国僧」の条である。この条はまた十六巻本の巻四に見えるが、内容は十八巻本より少ない。この条は次の通りである。

予少年時、於鍾陵邂逅日本國一僧、名安覺、自言離其國已十年、欲盡記一部藏經乃歸。念誦甚苦、不舍晝夜、每有遺忘、則叩頭佛前、祈佛陰相、是時已記藏經一半矣。夷狄之人、異教之徒、其立志堅苦不退轉至於如此。朱文公云：「今世學者、讀書尋行數墨、備禮應數、六經語孟、不曾全記得三五板、如此而望有成、亦已難矣。」其視此僧、殆有愧色。

僧言其國稱其國王曰「天人國王」、安撫曰「牧隊」、通判曰「在國司」、秀才曰「殷羅罷」、僧曰「黃榜」、硯曰「松蘇利必」、筆曰「分直」、墨曰「蘇彌」、頭曰「加是羅」、手曰「提」、眼曰「媚」、口曰「窟底」、耳曰「弭弭」、面曰「皮部」、心曰「母兒」、腳曰「又兒」、雨曰「下米」、風曰「客安之」、鹽曰「洗和」、酒曰「沙嬉」。(19)とある。以上抄録した楷書体の後半部分九十六文字は十六巻本では見られず、和刻十八巻本だけがある。昔から中国の文献では「倭」「邪馬台」「卑弥呼」などの国名・人名などについて、日本語発音の当て字が見られるが、この

和刻本に残される日本語の二〇単語は初めて集中的に日常用語の日本語発音を記録したものである。羅大經の記録は明代人の日本語発音記録の端緒となったのみならず、近世漢語、とくに一三世紀の江西方言と日本語の比較研究に対して非常に貴重な資料でもある。従来日本の学者をはじめとして両国の学者に重視されている。

(七) 『鶴林玉露』に載せる日本語彙発音記録の研究史から見た和刻本の重要性

一九八一年、わたくしは未熟な日本語水準で校勘本『鶴林玉露』のまえがきにおいて、この条に触れる単語の現代日本語との対応関係について次のように簡単に紹介している。

『鶴林玉露』中還有一些雜記也很有價值。如丙編卷四「日本國僧」條、不僅是一條研究中日交往的史料、而且其中記載的一些漢字的日語對音、對研究近古漢語音韻和日本語的發展也具有重要價值。如云：「硯曰松蘇利必（現代日語讀為：スズリ）、筆曰分直（フデ）、墨曰蘇彌（スミ）、頭曰加是羅（カシラ）、手曰提（テ）、眼曰媚（メ）、口曰窟底（クチ）、耳曰弭弭（ミミ）」等。

とある。『鶴林玉露』「日本國僧」条の記録は最も早く日本の学者に重視されていた。これは和刻本が日本で度々刊行されたことによる広い伝播のたまものである。江戸時代の学者本居宣長は『漢字三音考』にすでに触れていた。⁽²⁰⁾二〇世紀に入ると、日本学者の研究が盛んになった。その主な日本側研究について、朝山信弥「鶴林玉露『黄榜』などについて」（『国語国文』、一九三七年）、山田孝雄「国語の中における漢語の研究」（宝文館、一九四〇年）、渡辺三男「中国文献に見える日本語：鶴林玉露と書史会要について」（『駒沢大学研究紀要』一五号、一九五七年）、坂井健一「鶴林玉露・安覚伝の日本語」（『学叢』一一号、一九七一年）などがそれぞれある。ところが、管見に限り、中国学者の研究は極めて少なく、そのほとんどは一九八〇年代以降になされたものであろう。主な中国側研究

について嚴紹璽『中日古代文学関係史稿』（湖南文艺出版社、一九八七年）、張雅秋「從『鶴林玉露』中的一則史料看宋代中日文化交流」（『中日文化論叢』一九九六、杭州大学出版社、一九九七年）、丁鋒『鶴林玉露』所記日本寄語反映的宋代贛語音韻」（『球雅集』、好文出版、一九九八年）、何華珍・劉靜「日語漢字詞研究導論」（『漢字文化』、二〇〇五年）などがある。

『鶴林玉露』に載せる日本語彙發音記錄の研究史から見れば、日本学者の研究が盛んだった原因は、この日本語彙發音記錄が日本人学者に関心を持たせるという点だけではなく、物理的な条件として、その記錄がついている十八巻の和刻本が容易に見られるからでもある。一方、中国側の研究が少ない原因を考えてみれば、やはり中国に伝わっている『鶴林玉露』は日本語發音の記錄が脱落した十六巻本であるため、学者の考察視野が大いに制限されたためであるといえる。十八巻の和刻本は中国に還流して一九三六年夏敬観の校勘を経て商務印書館が線装本の形で刊行したが、流布範囲は狭かったため、一九八三年にわたくしの校勘本が出版した後、初めてこの分野を研究する中国の学者の注目が集まるようになった。

要するに『鶴林玉露』和刻本の存在はこの研究の基礎を築いたといえる。

結びにかえて

以上、わたくしがみずから経験した『皇朝事實類苑』と『鶴林玉露』に関する研究歴を回顧し、和刻本の重要な価値を強調したい。本稿の冒頭に引いた「徐福行く時書は未だ焚かず、逸書の百篇今尚お存せり」という歐陽脩の「日本刀歌」が詠っているように、日本の和刻本漢籍の中で、中国に全くない、或いは完全ではない文献はかなり

存在している。しかし流布範囲の制限によって中国側において、和刻本を利用する学者が極めて少ないし、したがってその重要な価値に対する認識も足りないといえる。このような状態を改変するために、校勘学者と出版業者の努力が必要であろう。『皇朝事實類苑』と『鶴林玉露』の和刻本のように、新たな校勘出版がなされれば、多くの研究者が利用できる環境が作り出され、その価値について自然に深く認識できるようになるのである。一方、日本側で中国の文史研究以外の学者についても、やはり和刻本漢籍に対する価値の認識が不足しているといえるであろう。前述した『參天台五台山記』を校訂する際に『皇朝事實類苑』を利用していなかったことにはこの偏りがうかがえる。漢籍が日本に輸入されてさらに再刊されたのは当時の日本人の中国趣味からだけでなく、どの漢籍が輸入および刊行するかしないかは、学問的な需要があったということも関係しているといえるであろう。当時の日本人の学問的需要によって輸入および刊行された漢籍は一定の程度で日本文化とも適合するところがある。そのため、出版文化史などの広い視野で和刻本漢籍の重要性を認識すべきであると思われる。

多くの貴重な和刻本の現存は誠に喜ぶことであるが、関連する一つの新しい憂慮がある。科学技術の進歩とともに、古典文献は続々とデータベースとなってきた。たとえば中国古代文献の集大成とされる『四庫全書』の電子版は数億文字の文献が一台のパソコンに収められており、キーワードを入力すると、検索も瞬間に出てくる。ところが、『四庫全書』に入っている書物の底本がすべて善本・足本とは言えず、本稿に取り上げた『皇朝事實類苑』と『鶴林玉露』の『四庫全書』本の内容はともに和刻本のそれよりも少なく、和刻本のみに記載されている内容に関しては電子版のみでは知りえない。このように時によっては、技術の進歩はある程度の障碍を生じてきたといえる。電子版の検索の利便性はそればかりを使うようになり、広い視野での探求欲が失い、結果として自らの知識の遮断が必至であるといえるであろう。中国にも日本にも、特に若い研究者はこのような注意を喚起すべきと思われる。

注

- (1) 「日本刀歌」は欧陽脩『歐陽文忠公集』巻五四に収録。
- (2) 「日本国伝」は『宋史』巻四九一に収録。
- (3) 『漢書』巻三〇「藝文志」。
- (4) 『皇朝類苑』「景印にあたって」(『皇朝類苑』、京都、中文出版社、一九八一年)。
- (5) 和刻本漢籍の定義について、長澤規矩也氏の『和刻本漢籍分類目録』においては、日本人により句読返点送仮名を加えられたものだけを指すが、本論においてはより広い視野で和刻本漢籍を定義して、日本での翻刻本漢籍も含めるものとする。
- (6) 『和刻本漢籍分類目録』(増補補正版)、汲古書院が二〇〇六年三月に出版。
- (7) 『古籍整理研究学刊』(一九九〇年第五号)、二十一～二十五ページ。
- (8) 和刻本に書名である『皇朝事実類苑』の「事実」が「事宝」となったのは、字形の類似によって発生した誤りといえるが、和刻本を刊行する時代の日本人にとっては、当時に流行した漢籍の『古文真宝』のように「事宝」という書名を妥当でないと思わなかったという理由もあるだろう。
- (9) 『中華印刷通史』(北京：印刷工業出版社、一九九九年)第七章第三節。
- (10) 平林文雄『参天台五台山記校本並に研究』(風間書房、一九七八年)、四六四ページ。
- (11) 李裕民輯校『楊文公談苑』(上海古籍出版社、一九九三年)。
- (12) 句点は平林文雄氏校訂本『参天台五台山記』のまま。
- (13) 李燾『統資治通鑑長編』巻二建隆二年九月壬戌の条に「初、周世宗既取江北、貽書江南、如唐與回鶻可汗之式、但呼國主而已。上因之、於是始改書稱詔」とある。
- (14) 関西大学、東西学術研究所『創立三十周年記念論文集』、一九八一年。
- (15) [http://chohoji.dip.jp/TENDAI-CD3/6付録Data/日本所版\参天台五臺山記\(日本所版\).txt](http://chohoji.dip.jp/TENDAI-CD3/6付録Data/日本所版\参天台五臺山記(日本所版).txt)
- (16) 明代正徳年間張志淳の『南園漫録』は『四庫提要』に「似羅書者十之九」と評される。
- (17) 『御製詩集』初集巻三九「太古雲嵐」(『四庫全書』本)。
- (18) 校勘本『鶴林玉露』は『唐宋史料筆記叢刊』に収録され、中華書局が一九八三年六月初版。
- (19) 句点はわたくしの校勘本『鶴林玉露』より。
- (20) たとえば、明鄭若曾の『鄭開陽雜著』に数多くの日本語単語を記録している。
- (21) 『漢字三音考』は天明五年(一七八五)に江戸の須茂兵衛により刊行。

“礼失而求诸野”

——以实例试论和刻本汉籍的研究价值

王瑞来

关键词：和刻本汉籍（和刻本漢籍） 皇朝事实类苑（皇朝事實類苑）
鹤林玉露（鶴林玉露） 中国史研究（中国史研究）
日本史研究（日本史研究）

汉籍在日本，除了宋版、元版、明版等原书收藏之外，长期以来，自行翻刻刊印的尚有不少，由此而产生了和刻本汉籍。在和刻本汉籍之中，中国完全失传，或者是残缺不全者往往而在。本文以笔者以往研究过的和刻本《皇宋事实类苑》与《鹤林玉露》为例，将其与中国国内传本进行了比较研究。在指出和刻本汉籍文献研究价值的同时，还指出了这种研究价值并不仅限于中国文史研究领域，对日本史研究也具有一定的价值。对此，笔者特别举出了这样的例子，即日本学者在校订成寻的《参天台五台山记》时，没有使用在日本很容易看到的和刻本《皇宋事实类苑》，从而降低了校订的质量。

从更广阔的视野看，汉籍进口日本，并被翻刻，不仅仅出于当时日本人的中国情结，还是反映学术需要与实用价值的市场经济所决定的。从而因需求而选择进口和刊行的汉籍也在一定程度上与日本文化相契合。因此，有必要从出版文化史的视角认识和刻本汉籍的重要性。

为数不少的和刻本汉籍的存在令人欣慰，但其重要价值尚未得到充分认识，在研究领域也未得到充分利用，诚为憾事。而与这一现状相关联的新的忧虑又已产生。这就是，随着科技的进步，陆陆续续建立了涵盖面相当广的古典文献的数据库。比如，集中国古典文献之大成的《四库全书》电子版，可以将数以亿计的文字收纳于一台小小的笔记本电脑之中。只要录入关键词，所需资料瞬间可得。然而，收录于《四库全书》的书籍版本并不尽是善本或足本。本文所例举的《皇宋事实类苑》与《鹤林玉露》的《四库全书》本就均比和刻本的内容少。由于电子版检索快捷便利，目前变得唯电子版是用。其后果则是逐渐丧失了视野广阔的求知欲，形成了知识的自我遮断。这种状况在中国在日本都是普遍存在，尤其需要引起年轻一代学者的注意。而对于尚存在于电子版之外的和刻本汉籍的充分重视与使用，正可以在一定程度上弥补电子版之不足。